

# ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.22 2020.9.5

## = 満願寺展 = 描かれた満願寺とその自然 「死出ノ山」とは何か



### 描かれた満願寺

#### 1 満願寺

山号は栗尾山、江戸時代に高野山龍光院末、現在は真言宗豊山派に属する。寺伝によると、神亀年間（725年頃）に、観音池から出現した一寸八分の千手観音像を堂宇を建立し安置したのが始まりとされる。その後、坂上田村麻呂が八面大王を倒す際に、力を貸したため彼による中興ともいわれる。

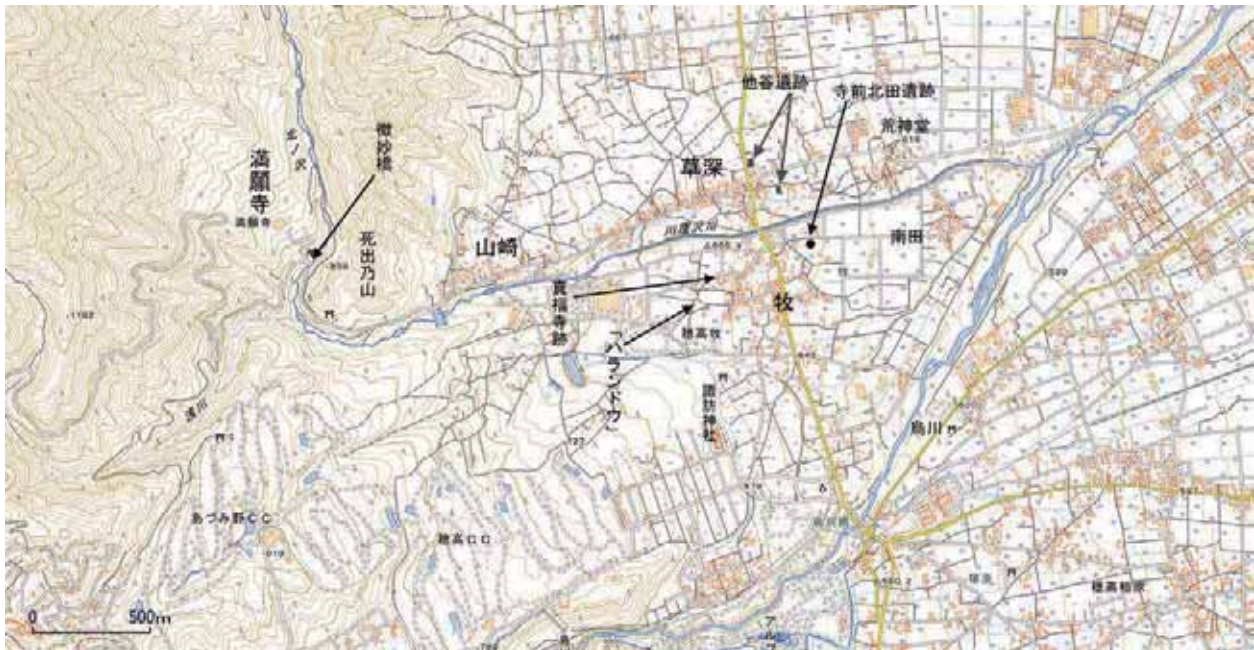
1556年（弘治2）の再興勸進状に、混乱のなか寺中で火災が発生し、伽藍を焼き尽くしてしまったとある。その後、再興が進み、1571年（元龜2）から1621年（元和7）までの木造巻数札や祈祷札などが、中興の権大僧都尊応による活発な活動を伝えてくれる。

1582年（天正10）、武田氏を滅ぼした織田信長が朱印状を出して保護をする。そこに「満願寺」の名前がはじめて登場する。翌年、領主に復帰した小笠原貞慶は、造成に力を入れた。小笠原氏にとって重要な祈願所であったのであろう。できあがった観音堂は規模の大きな五間堂であった。境内絵図の「堂平」にあった観音堂が破損したため、下つての造営といわれる。ただし「堂平」の位置はわからない。

江戸時代、領主の保護が厚く77石の寺領が安堵され、信濃三十三番観音霊場二十六番札所となり多くの参詣客を集めた。しかし、1814年（文化11）、火災により庫裡等が焼失する。その直後、十返舎一九が取材に訪れ滞在している。文政年間に庫裡等を再建して伽藍を整えている。明治維新に廃仏毀釈によって廃寺となるが、1870年（明治12）に奈良県の良興院を移転する



第1図 観音堂(『栗尾山満願寺絵はがき』当館蔵)



第2図 満願寺とその周辺

かたちで再興し、明治42年に檀信徒の願いによって満願寺に改称し、現在に至っている。ただ、昭和21年に観音堂（第1図）を焼失する。

昭和20年代まで8月9日のお施餓鬼の日に、安曇野の各地から新仏がある家はホトケムカエのために満願寺に参詣して、通夜をして翌10日に帰ったと言われる。

満願寺のある安曇野市穂高牧は、平安時代の公用の馬を飼養する御牧の一つ「猪鹿牧」までさかのぼる。その後、猪鹿之牧、伊賀之牧と表記は変わり、略されて牧になる。烏川と川窪沢川に挟まれた地形は、馬の管理に適していたのであろう。鎌倉時代の末に草深郷が登場、戦国時代の終わりに一緒になり「牧草深村」、17世紀後半から「牧村」になる。他谷遺跡からは、平安時代や中世（13世紀から16世紀）の生活の跡、寺前北田遺跡から中世の備蓄銭が発見されている。この辺り一帯は、平安時代から人々の生活の場であった。

## 2 松本藩にとって満願寺は

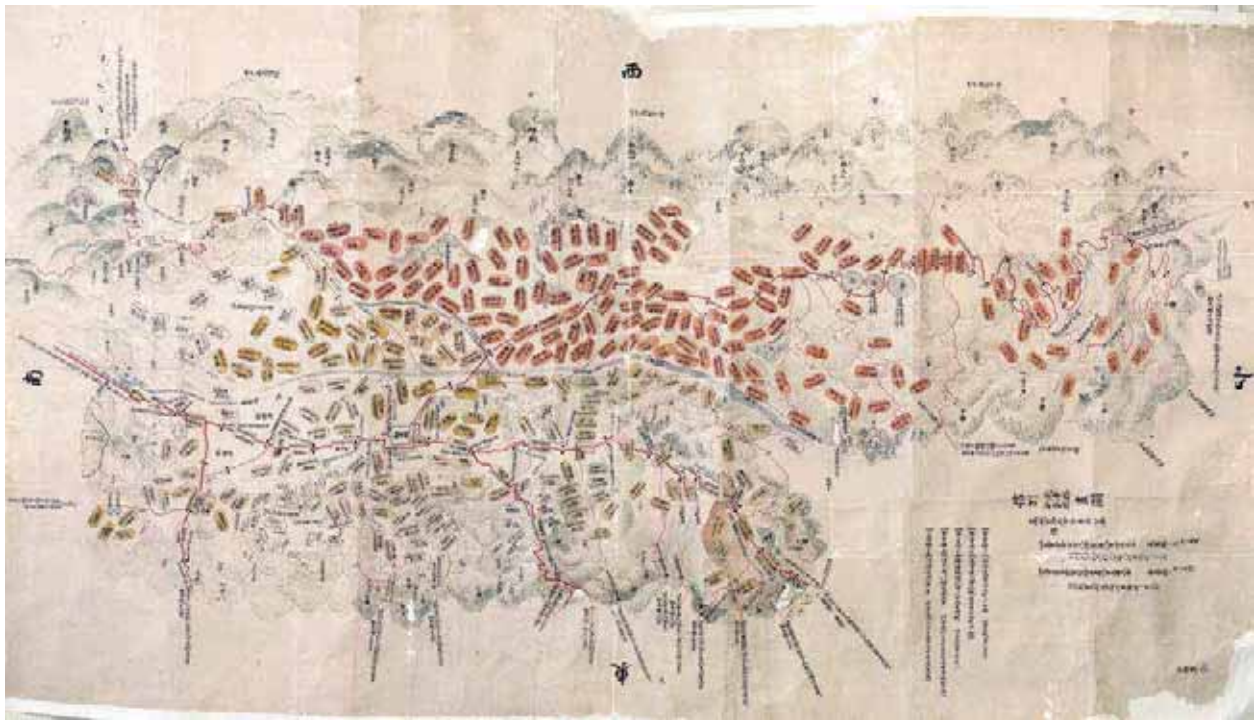
### 郡図（藩領図）

信州安曇郡筑摩郡画図（第3・4図 松本市立博物館蔵）

水野氏が1642年に入部してからそれほど経たない時期の製作と推定されている。松本藩領の他に、高遠藩や高島藩等の村々も記載している。道は朱線で表現され、松本城下から安曇郡へ向かう道は、城下町の北側から、宮淵村と蟻ヶ崎村の間を通過して、木曾川（奈良井川）と梓川を渡る。この表現は『正保国絵図』（1647年）と一致する。西山一帯の里山は、柴山、雑木、薪山と注記される。後段でふれるように当時の人々が、里山をどのように利用したのか知る上でも貴重な資料である。

絵図中央、牧草深村（牧村と草深村に別れていない）の西側に入母屋造の建物を描き「栗尾観音」と注記する。満願寺である。その西北の新屋村西に入母屋の建物を描き「松尾」と注記する。松尾寺である。満願寺より松尾寺の標高が高く描かれるが、1697年（元禄10）に松尾寺を古屋敷から現在地に引き下ろした記録があり、それ以前の表現か。このほか保高村の西側に穂高神社が描かれ「保高明神」と注記される。両郡内をみても、二寺以外は小笠原氏の菩提寺「廣沢寺」だけが描かれる。なお、建物が描かれず「宝光寺」（放光寺）と注記があるが、地名標記の可能性が強い。

西を上絵図を置くと、栗尾観音と松尾山は柴山等が広がる飛騨山脈の裾部の、木々が生い茂る小高い山の中に描かれる。また、本来ならば、栗尾観音と松尾山ははるか南に描かなければならない。意図的に中央に置いたようにも見える。



第3図 信州安曇郡筑摩郡画図（松本市立博物館蔵）

安曇郡・筑摩郡図（第5図 北安曇教育会蔵）

笹部水野氏の所領が描き分けられており、『信州安曇郡筑摩郡画図』より70年ほど経って1713年（正徳3）～1725年に描かれた松本藩領図である。島内の村々が成相組に含まれ安曇郡の範囲に入っており、城下町から安曇野への道も六九からのスタートとなっている。

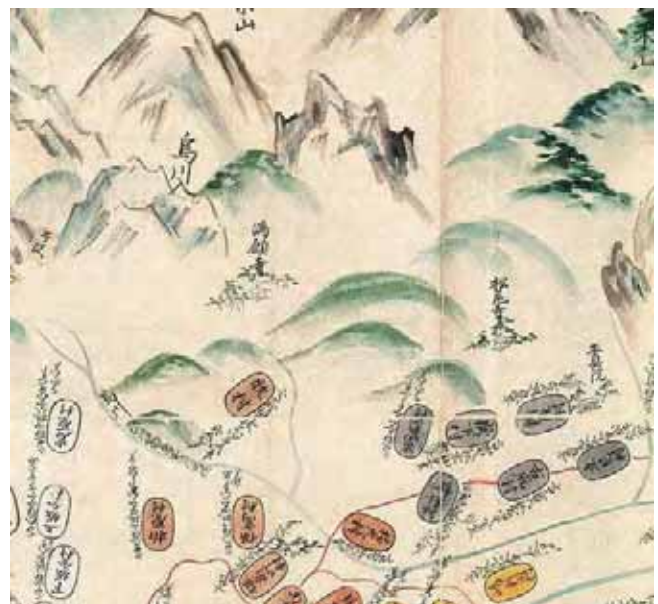
寺院は、安曇郡内には満願寺（穂高組）、松尾寺、正真院（松川組）、大沢寺、霊松寺、天正院（大町組）、泉福寺（池田組）、筑摩郡には、法善寺（麻績組）、硯水寺（会田組）、広澤寺（山家組）、若澤寺（島立組）が描かれている。「松尾寺」は満願寺より低い位置に移っている。烏川に流れ込む川（川窪沢川か）の間に牧村が描かれ、満願寺はその西に山を隔てられて描かれる。

国絵図

江戸幕府は国絵図の作成を命じ、信濃国は「正保国絵図」、「元禄国絵図」、「天保国絵図」の3枚が残っている。楕円形の枠の中に村名や村高、主要交通路は朱線で表し、一里塚や橋、寺社などが描かれる。正



第4図 第3図満願寺部分拡大



第5図 安曇郡・筑摩郡図 部分（北安曇教育会蔵）

保国絵図（1647年）は、安曇野市域に3棟の入母屋造、3棟の切妻造の建物を描いている。入母屋造の建物に「松尾山」、「栗尾観音」と注記し、ほかの4棟に注記はない。元禄国絵図（1701年）には、「松尾薬師堂」だけが位置を下げ、同じ6棟の建物が描かれる。「栗尾 観音堂」と注記される。「大宮大明神」（古厩村）、「保高大明神」、「小林寺」（上堀金村）、「住吉大明神」にも注記が入る。正保国絵図に描かれた寺社が二つの国絵図のメルクマールとして継続して記入される。

……松本藩の祈祷寺院としての満願寺……

満願寺は、江戸時代前半の国絵図・郡図には、必ず松尾山、松尾寺ともに、「栗尾観音」「栗尾 観音堂」「満願寺」と注記され建物が描かれる。小笠原氏は、満願寺の本堂（観音堂）の造営を、安曇・筑摩郡の総力を挙げて援助し支援している。大名は菩提寺に加え、一族の繁栄、戦の無事、領内平穏など現世利益を祈る祈祷寺院を必要とした。満願寺は、小笠原氏の重要な祈祷寺の一つであったのであろう。

### 3 満願寺、さいのかわら、死出乃山

「穂高組邑々寺社方角道法改帳 元禄十一年歳四月日」（以下、『穂高組寺社改帳』）

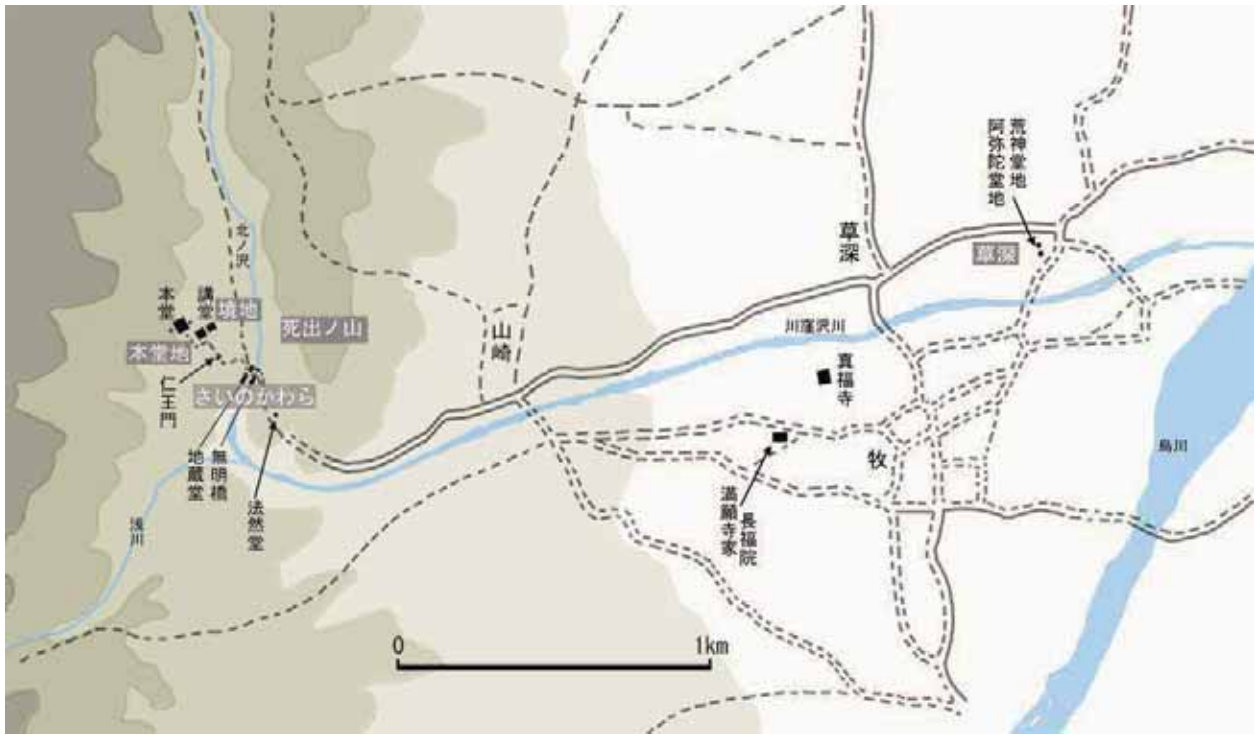
元禄国絵図作成のため、1699年（元禄11）に穂高組内の小堂を含めた寺社の調査結果である。名称と各村の高札場からの方向と距離、存在している建物の構造と規模、棟方向と向き、さらに本尊とその寸法、作者が記載される。寺院には、神社の祠も多く、神も仏も区別していない姿がみえる。

満願寺は、数多くの建物が「本堂地」、「境地」、「さいのかわら」、「死出山麓北」、「草深之内」と分けて記載されている。それを整理すると第1表ようになる。

後で取り上げる境内絵図と照らし合わせると、「さいのかわら」には、無明橋、地藏堂と法然堂がある。「本堂地」は仁王門、本堂（観音堂）があり、現境内の西側部分、「境地」はその東側の講堂や庫裡の部分である。「死出山」は、法然堂より東部分になる。「草深之内」の荒神堂と阿弥陀堂は「……堂地」と記されすでに潰れて存在していない。満願寺家長福院は、名称の通り満願寺と関係が深く、方向、距離から「ハランドウ」と呼ばれる場所にあった可能性が高い。それらに満願寺の祈祷札に「真福寺」とあり、かつては塔頭であった可能性もある末寺の真福寺を加えて、建物の分布を推

位置	建物	屋根	規模	棟	向	
境地	客殿	小板葺	7間半 12間半	西東	南	
	厨	平屋	7間 8間	西東	南	
	護摩堂	小板葺	3間 3間	西東	南	
	位牌堂	小板葺	3間 3間	西東	南	
本堂地	三門	平屋	1間3尺 1間1尺	西東	南	
	本堂	小板葺	9間1尺 9間2尺	四ツ棟	南	
	本堂西	十王堂	小板葺	2間 3間	北南	東
		姥堂	平屋	2間 2間	北南	東
		阿弥陀堂	小板葺	3間 3間	西東	南
		鎮守明神 伊勢勧請	拜殿	4尺 3尺	北南	東
		八幡	祠	2尺 2尺	北南	東
		権現	祠	2尺 2尺	北南	東
	本堂東	如意輪観音堂	小板葺	2間 2間	西東	南
		焰魔堂	平屋	3間 3間	北南	西
本堂南	鐘楼堂		1間4尺 1間4尺	北南	—	
	仁王門	小板葺	3間半 2間	西東	南	
さいのかわら	地藏堂	萱葺	3間 3間	西東	南	
	無明橋	小板葺	2間 8間	北南		
	車返					
	法然堂	萱葺	3間 3間	西東	南	
死出山麓北	阿弥陀堂	萱葺	3間 3間	西東	南	
	荒神堂地（潰れ）					
草深	阿弥陀堂地（潰れ）					
	満願寺家長福院 寮	萱葺	4間 9間	北南	東	
真福寺	境地 東西10間 南北13間					
	客殿	萱葺	5間 13間	北南	東	
	堂（大破）	萱葺	3間 3間	北南	東	
	境地 東西1丁3間 南北1丁					

第1表 『穂高組寺社改帳』の建物



第6図 『穂高組寺社改帳』に記載される建物の配置（明治43年測図 陸軍測地部5万分の1をベース）

定すると、第5図のようになる。そこから次のことがわかる。

まず、「満願寺」は、草深・牧地区と重なる東西3kmの広大な空間に建物が展開する。村落と密接な関係にあったといえる。ただ、草深の堂は潰れており、縮小が始まっていた可能性が強い。逆に、かつてはもっと多くの建物があった可能性もある。満願寺家長福院の規模の大きな寮が牧地区の集落の外れに存在する。多くの修行僧が寄宿して満願寺で修学を積んでいたことがわかる。

「本堂地」と「境地」は別に記載される。本堂（観音堂）が「栗尾観音」、境地がその別当寺である満願寺ということではないか。かつては本堂（観音堂）は堂平にあり、移って来たともいわれる。栗尾観音と満願寺は隣接していなかったのかもしれない。その名残か。

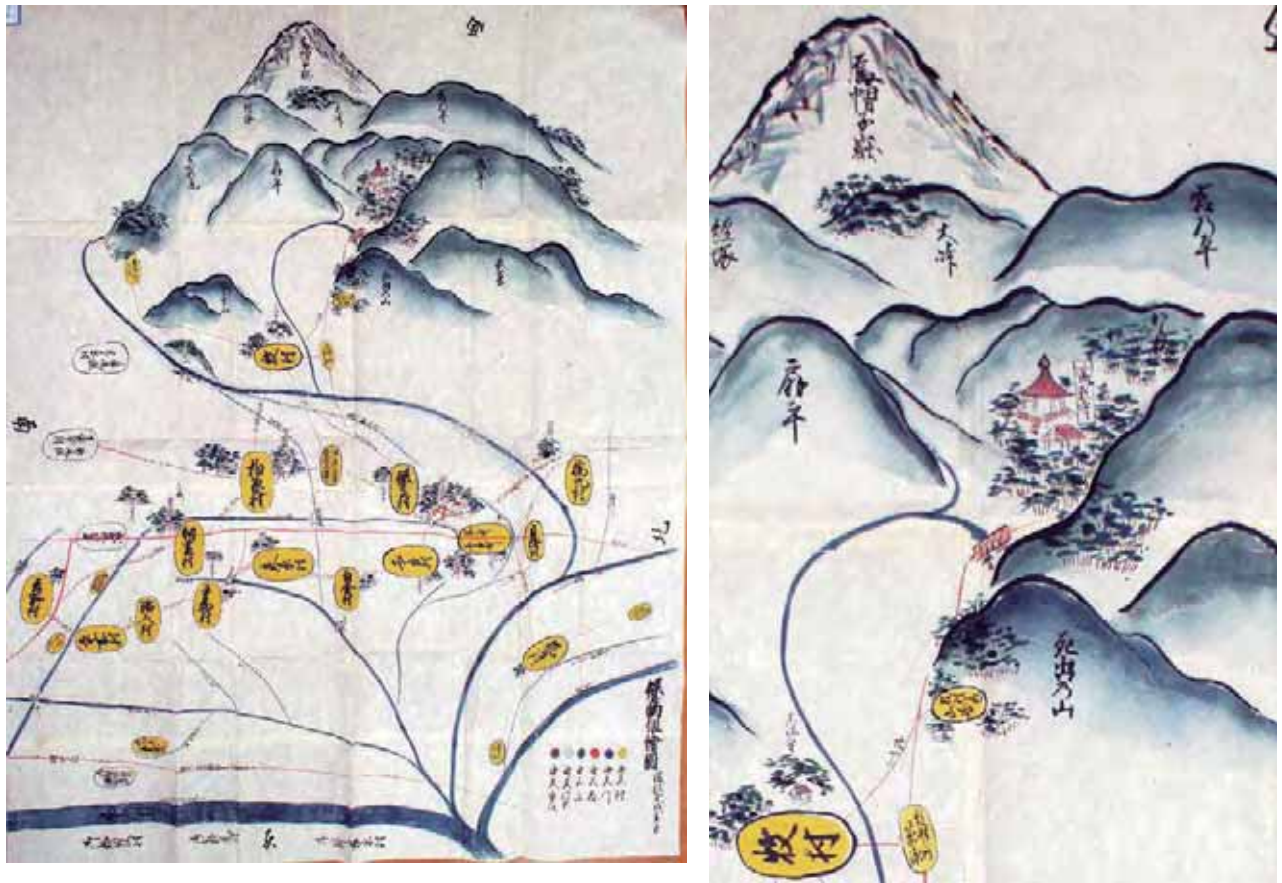
「死出山」は、阿弥陀堂が「山麓北」にあるがその位置はわからない。1589年（天正19）に、小笠原貞政（秀政）は観音堂の燈明銭（維持費用）として、「草深之内等々力分三貫文、并四手山法然堂、赤嵐草深分之原」を寄進している。「四手山法然堂」も含まれることは、死出ノ山、法然堂がある「さいのかわら」は、栗尾観音と別の空間と認識されていたのではないか。

組絵図 保高組絵図（第6・7図 長野県立歴史館蔵）

村名や道法の記載が「元禄国絵図」と一致するのでその下図として作成された可能性がある。

手前は、犀川、三川合流、流れ込む堰や河川、その後には村々とそれを結ぶ道、さらに寺社を平面的に描く。なお、保高村と保高町との保高大明神は、三つの社殿、「三宮」が描かれる。最も西の牧村は、枝村の大坂、草深、山崎を描く。

絵図の三分の一は西山である。正面に山脈ではなく、「烏帽子嶽」が一つ象徴的に大きく描かれる。その手前、扇平と城平の間に、「満願寺」と注記される。他の寺院と明らかに違い、穂高組のシンボルのように擬宝珠をのせた朱塗りの宝形造りの堂、朱塗りの切妻造の建物が描かれる。観音堂と客殿あるいは護摩堂か。満願寺の前には、川窪沢川に流れる川（北ノ沢）に赤く塗られる大きな橋が架かる。無明橋であろう。さらにその手前、「牧村之内山崎」の集落の間に木々がこんもりと茂る山が描かれ、「死出乃山」と注記される。『穂高組寺社改帳』では「本堂地」と「境地」と分けられた空間が満願寺に包括され、無明橋（さいのかわら）、死出山と三分で描かれている。



第7図 『保高組絵図帳』とその満願寺拡大部分（長野県立歴史館蔵）

#### 寺院の境内絵図

『信濃國栗尾山図』（第8図 満願寺蔵 以下、『栗尾山図』と呼ぶ）

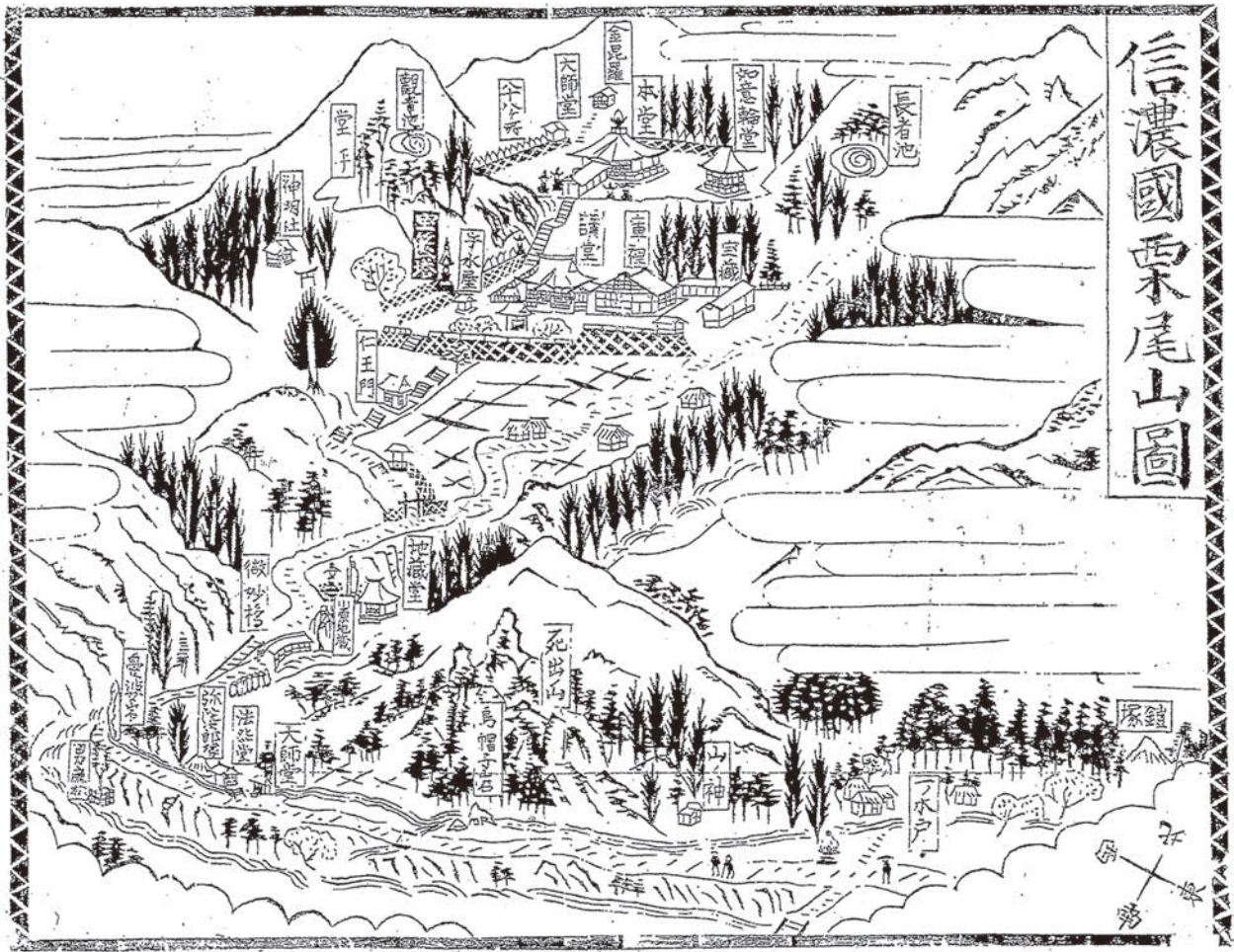
版木を満願寺が所蔵している。その刷物は縮小されて、現在の満願寺のパフレットに掲載されている。版木裏面に「明治廿五年四月開帳之際新調之 施主西穂高村 牧 古幡房吉 再興第壹世 古幡貫善代」と墨書されており、復興から15年経った1892年（明治25）住職古幡貫善の代の御開帳にあたり、西穂高村牧の古幡房吉が施主となって絵図が描かれ、版木が彫られ刷って配られたと推定される。ただし、その際に配られた刷物の『栗尾山図』はみつかっていない。満願寺ではなく栗尾山と記されたのは、まだ良興院であったためである。絵図は、南から北をみるように山崎から西を描き、手前は雲によって隠され川窪沢川より南は描かれない。

参拝者は、牧方面から川窪沢川を橋で渡って一の木戸（山崎の集落）で左に向かう。ここからが参道になる。山ノ神を見ながら西に向かう。烏帽子岩の横を通り川窪沢から取り入れた堰を渡る。その右手に、大きな険しい山が描かれる。裾部に松林が茂るが、頂部は地肌が見える。大きく「死出ノ山」と注記される、そのまま大師堂、法然堂、弥陀次郎塚の横を下に男鹿松を見て、右に回る。少し進むと、道が二手に分かれる。

山際は、六地藏を通過し微妙橋を渡り、川原地蔵の前を通り地蔵堂へ至る。ここで突き当たりとなる。

左手に進むと微妙橋の横の橋を渡り、そのまま民家の中を斜めに横切って山中に入っていく。大峠を越えて中房温泉へ向かう道である。百瀬茂八郎（安曇野市三郷一日市場）が1821年（文政4）に、明礬採取とともに温泉旅館を開業し、江戸時代末期には四軒の旅館があったといわれる。この道が中房温泉に向かう主要な道であり、かなり人の往来があったのであろう。

その道沿いに冠木門があり、ここからが満願寺境内となる。そのまま制札に突き当たり左へ向かい石段をあがり、仁王門に至る。真っ直ぐに登り石垣にあたり左に折れる。そのまま上に向かうと講堂や庫裡、宝蔵のある空間に出る。さらに、手水屋、宝篋塔の横の石段を登ると本堂（観音堂）に突き当たる。堂の東横に如意輪堂、金比羅、大師堂、八十八ヶ所が周りがある。さらに背後の山中に、長者池、本尊が出現



第8図 『信濃國栗尾山図』 1892年(満願寺蔵)

したとされる観音池、堂平などが描かれる。なお、仁王門の西側に神明社が描かれる。

「穂高組寺社改帳」と比較すると、草深の建物、牧にあった寺家長福院は描かれなくなる。満願寺の信仰空間は山崎の集落、烏帽子岩から西へ収縮している。本堂周辺には、如意輪堂だけとなっており、阿弥陀堂、十王堂はなくなっている。描かれた講堂、庫裡は文化11年の火災の後の再建の姿である。

この絵図は、画面を斜めに中房道で区切って、左上を「満願寺」、右下を「死出ノ山」、その間に微妙橋の架かる「さいのかわら」を描いている。保高組絵図の「死出乃山」、赤い橋(川)「満願寺」の表現と一致する。1865年(元治2)の「御黒印境内絵図」(個人蔵)は、橋が架かる川に朱書きで「三途川」と注記される。

『長野県信濃国南安曇郡西穂高村字牧 真言宗新義派 栗尾山良興院之景』

(第9図 以下『信濃宝鑑図』とよぶ)

明治34年刊行の『日本名蹟図誌第七編・信濃宝鑑七巻』(合資会社名古屋光彰館蔵版)は、名所旧跡、神社仏閣を実際に画工が現地を訪れてスケッチをし、綿密な銅版画を起こし縁起などを書き込む銅版画集である。折り込み、A4版2ページ、1ページ、その半分と差別化がはかられ、満願寺は2ページが使われる。縦長のため、山崎から微妙橋まで、特に大師堂までが短くデフォルメされているため『栗尾山図』とは違和感がある。

川窪沢川(栗尾沢)を渡る橋は描かれない。烏帽子岩がはじまりで、堰に橋が架かり「三途の川」と記される。参道の出発のようである。右手に頂上が雲がかかりまばらに松が生える、「死出ノ山」が尾根のように描かれる。参道は、六地藏の手前で二手に別れ、山際は微妙橋を渡り地藏堂、「西ノ河原」へ突き当たる。手前の道は微妙橋の横を渡り田畑の中を通過して山中に入っていく。寺院へは「表門」と注記された冠木門から入る。そこから先は、ほぼ「栗尾山図」と同じ配置である。ただ、明治28年に建立された聖天堂(安曇野市有形文化財)が描かれる。



第9図 栗尾山良興院之景『信濃宝鑑』より

『栗尾山図』では三分割されていた画面が、「さいのかわら」そのままに、満願寺を大きく「死出ノ山」を縮小させて描いている。

『長野県信濃国南安曇郡西穂高村字牧 新義真言宗 栗尾山満願寺之全景』

(第10図 満願寺蔵 以下、『満願寺之全景』とよぶ)

枠外に、「明治四十五年四月廿八日印刷明治四十五年五月一日発行著作権所有者満願寺住職古幡乗善」と入っている。1912年に満願寺が発行した境内図である。現在一枚が満願寺に残っている。

銅版画ではないが同じ縦長の『信濃宝鑑図』にイメージに近い。ただ、表現内容が違い、例えば『信濃宝鑑図』が山々を弧を描くように緩やかなのに対して、北アルプスらしい峻険な山を描いている。

栗尾沢(川窪沢川)を橋で渡り、幟が立った「一の木戸」から西に向かう。烏帽子岩を通過すると堰を渡る。ここに「車返」と注記がある。大師堂、乳母岩の横を通り右に回り少し進む。

ここからは『信濃宝鑑図』と大きく

変わっている。まず六地藏の前にそれまでは禁札(制札)の手前にあった冠木門が描かれる。ここからが境内ということになるか。そのまま微妙橋を渡り地蔵堂を参拝して、西ノ河原の中を登っていくことになる。従来六地藏の前で別れた道は微妙橋の横の橋(畜生橋)を渡り西ノ河原で合流する。西ノ河原から制札を入ると、それから上の表現は、本堂横に招魂塔が建てられる以外、二つの絵図と同じである。昭和21年に観音堂とその周囲の建物が焼失するが、この絵図はそれ以前の姿を描いている。

死出ノ山は、地山がむき出しでまばらに松が茂る山が描かれる。実際に小さく、裾に雲が描かれ参道と切り離され、満願寺と距離を置いて存在感を小さく描かれる。

中房温泉に向かう道は、雲の中に消えてしまい描かれなくなる。中房川沿いに温泉まで入ることができるようになったためか。満願寺の空間は行き止まりの空間になる。

これまで、「さいのかわら」は地蔵堂に突き当たる独立した空間であった。ところが、冠木門が六地藏の前に移動することによって、地蔵堂、賽の河原を参拝の通過点となり、境内地に含まれることになる。

なお、満願寺の年中行事が記されている。施餓鬼会は7月16日となっており、8月9日のホトケムカエの行事の記載はない。8月15日は鎮守社祭典とある。

.....死出ノ山と満願寺.....

満願寺はかつて「本堂地」「境地」「さいのかわら」「死出山」「草深」で構成され、牧村と重なる広大な範囲に堂や祠などさまざまな建物が展開していた。それらは、仏教、神道などさまざまな信仰の施設であった。さらに奥の山中に堂が存在した伝承もある。古代まで創建がさかのぼる牛伏寺・若澤寺(松本市)



が、山中から里まで広大な空間を持つことと共通する。村落内に展開する多くの施設は、人々の暮らしと密接に結びつき、他地方からも参拝者や修行僧も数多く集まったのであろう。しかし江戸時代に村落から信仰施設はなくなって、満願寺、さいのかわら、死出ノ山の三つの空間に縮小する。人々の暮らしと宗教空間の満願寺との境がはっきりしてきたのであろう。

明治時代の再興後も、満願寺、さいのかわら、死出ノ山は、一体ではなく距離を置いた宗教空間であった。しかし、さいのかわらは徐々に満願寺に含まれていく。反対に、死出ノ山は満願寺から距離を置き、縮小され描写に力が入らなくなる。ついには人々から忘れ去られることになる。

1923年刊行の『南安曇郡誌』に「(八月)九日=新仏ある家は仏迎のためとて栗尾満願寺に参拝し、通夜して翌十日帰る」とホトケムカエの行事が記される。安曇野各地から檀家ばかりではなく、仏教、神道、宗派に関わらず、精霊を迎えにやって来る。新盆までは精霊が満願寺に留まっているとされたのである。死出ノ山の記憶が薄れていく中で、記録にホトケムカエが登場する。

死出ノ山は、再興勸進状に六道と別れ百三十六の地獄の体相とあるように、中世に仏教の地獄・極楽思想と結びつく。10世紀初めの古今和歌集に、「死出の山 麓を見てぞ かへりにし つらき人より まづ越えじとて」(789 兵衛)と歌われるように、かつてはあの世とこの世を隔てる山と理解されていたようである。古くから死出ノ山は宗派に関係なく迎えに行く、仏教が伝わる以前から、精霊たちが集まる場所とされていたのではないかと。

『保高組絵図』の死出ノ山は、村々が広がる先、西山の手前に描かれる。人々は奥の無明橋と満願寺を見ることはできない。その後が連なる山々でなく、一つのピーク、烏帽子岳が描かれる。死者の魂は、死出ノ山へ向かい、そして烏帽子岳に登っていくように見える。

現在、死出ノ山を安曇野から確認するのは、木々が生い茂り難しい。江戸時代の死出ノ山は、どのような姿をしていたのであろう。(原 明芳)



第 10 図 栗尾山満願寺之全景 1912 年 (満願寺蔵 古幡開太郎氏修正)



死出ノ山、無明橋、満願寺（村上紀子画）

# 満願寺周辺の自然

## 1 死出ノ山の植生

死出ノ山はどんな植生だったのだろうか？

残されている古い絵図と現在みられる植生から、江戸の頃、人々が眺めていた死出ノ山の植生を想像してみたい。いくつかの絵図に描かれている死出ノ山は、今よりずっと植生が少ないように見える。

標高900m 足らずでそれほど高くないが尾根が切り立っており、細尾根で白っぽい花崗岩の地肌が目立っている。そこにはかるうじて、乾燥と日当たり強いアカマツがたくましく点在するが、裸地も多い。尾根に比べると山腹のアカマツは次第に樹高が高くなり樹林を形成、ヤマツツジやネズミサシといった樹木が現れる。

ここは社寺林であるが、里に近いことから人々によって下草や落葉落枝は利用されていたかもしれない。それもあって表土はなかなか形成されず、植生は乏しかっただろう。死出ノ山は、前ページの水彩画に描かれたように、裸地が多く、地形が急峻で、限られた草木しか育たない、少し特殊な景観だったのではないだろうか。生命のにぎやかさよりも、死者を連想させるような山であったのかもしれない。



図1 『信濃國栗尾山図』より死出ノ山を部分拡大(1892年)



図2 栗尾山良興院之景『信濃宝鑑』より死出ノ山を部分拡大(1901年)

### 現代に残された植生

現在、死出ノ山は、東～南部の裾野は民有林であるが、それ以外の大部分は国有林となっている。中信森林管理署の『第5次国有林野施業実施計画国有林野施業実施計画図(平成27年度樹立)中部山岳森林計画区』によると、死出ノ山は「針葉樹の天然林」とされており、樹齢は約119年および139年と記されている。署の資料では国有林とされたのは明治初期の年代が記されているが、明確ではないとのことであった。確かな年は不明だとしても、明治初期であればちょうど廃仏毀釈と重なる。現在の国有林はもともと、満願寺の所有地であったが、その後国有林に移ったものと推察された。

現在の国有林では、死出ノ山は「天然林」と位置付けられており、国有林となって以降、人為的な手入れはなされていない。キノコ類の採取利用が古くからあり、現在も地元の組合が借受ける形でキノコ類の採取を行なっている。戦後の国有林の施業に関わった地元の古老に伺うと、昔から地元の人でさえ、国有林内への立ち入りやキノコ類以外の採取は厳しく制限されていたという。つまり人為的な影響の少ない植生が、少なくともおよそ150年残されていることになる。いったい、どんな植生が残されているのか。

その前に植生のベースとなる地形地質を解説する。北ノ沢に沿って南北に断層が走っており、断層の東(死出ノ山側)は花崗岩、西の北アルプス側は付加コンプレックスとその崩壊堆積物という地質である。死出ノ山側の山塊は急斜面の尾根が切り立ち、表土は浸食され細尾根となり、花崗岩がむき出しとなって

いる。

このようなやせ尾根に生育できる樹木は限られる。その代表がアカマツである。死出ノ山の尾根部では厳しい環境のために高く育つことのできないアカマツが分布しており、その林床にはミヤマヤシャブシ、ネズミサシ、ネジキ、ミヤママコナなど、アカマツ林でよくみられる植物が自生する。いずれも乾燥や表土のほとんどないような厳しい環境に生育する植物である。このような植生調査の結果から、死出ノ山でみられるアカマツは自然植生と考えられた。



写真1 死出ノ山の尾根付近のようす

このやせた尾根のアカマツ林こそ、江戸の風景の一端を未来の私たちに見せてくれる植生なのである。

#### 急斜面の谷間に育つヒノキ林

尾根から少し斜面を下るとヒノキが出現しはじめる。中腹はヒノキとアカマツが完全に交じり合った樹林となる。安曇野市内において、地形や地質などが似たような環境では、アカマツ林の遷移が進むとコナラ（ここではミズナラも混在する）林へと移っていく植生が多いが、死出ノ山ではヒノキが出現する。その要因のひとつは急傾斜地であり、表土が少ないことが考えられる。



写真2 死出ノ山の谷間 ヒノキ群落のようす

そして谷間になると、ヒノキが優占する樹林〔ヒノキ群落〕が広がっている（P.15、図4 現存植生図参照）。2019年にこのヒノキ群落について植生調査を行ったところ、高木層は樹高20m程度、アカマツが1本出てくるのみでヒノキの純林に近かった。樹高20m程度で胸高直径は34～55cmとばらつきがある。これらの胸高直径の大きさやばらつき、そして国有林としての履歴を勘案すると、ヒノキの由来は、明治時代よりもさかのぼる可能性がある。

#### 安曇野の山から伐り出された天然性のヒノキ

現代の日本において、ヒノキの人工林はスギに次いで多く、ごく一般的な山の植生のひとつである。しかしヒノキの自然植生となると、全国的にもかなり限られたところにしか残っていない。ヒノキは古くから有用材として知られていたため盛んに伐採され、城や寺院等の建設に利用されてきた。このためにヒノキの自然植生はほとんど失われたとされる。ヒノキの天然林の分布は福島県を北限とし、屋久島まで分布するが、積雪に弱く太平洋側に偏っていることが知られている。こうした分布の中でも、木曽谷は古くからヒノキの産地として有名であり、現在もヒノキの天然林が最も多く残る。なお、木曽谷のヒノキを高く評価し、本格的な伐採を開始したのは豊臣秀吉の時代からと言われている。

では安曇野の北アルプスの山腹に天然のヒノキ林はあったのだろうか？現在、北アルプスの標高1,500m以下の冷温帯の樹林を歩くと、サワラ（ヒノキ科）の自然植生は多く存在するが、ヒノキの自然植生をみることがほとんどない。近隣では、大町市鹿島の国有林内に「木材遺伝資源保存林」として保全されているヒノキの天然林がある。

南安曇郡誌によると、烏川山・中房山は長期にわたって伐木事業が行われるようなことはあまりなかったが、近隣の村落の家作木や、用水堰・川除・橋梁等の用材は常にこの両山から搬出されていたという。信府統記によれば、烏川山には雑木のほか榎（サワラ）が多く、中房山には雑木・檜（ヒノキ）があると記載されている。

烏川山については、樹木の種類と量の具体的な記録が記された古文書が残されている。下記の表は、1709（宝永6）年、善行寺本堂の普請用材を烏川山から搬出して岩原村で預かった木材の量の記録である。

1709（宝永6）年、善行寺本堂の普請用材を烏川山から搬出して岩原村で預かった木材の量  
（ ）の樹種名は著者による

黒榎（サワラ）板 740挺  
真榎（サワラ）三方 40挺  
檜（ヒノキ）三方 21挺  
樅（モミ）三方 27挺  
榎（サワラ）三方 24挺  
摺うす 6柄  
五葉・檜（ゴヨウマツ・ヒノキ）等の志々料 25枚  
桶子 6つ  
榎（サワラ）の角材 107本

数量をみると、やはり圧倒的にサワラが多い。ヒノキについて取り上げると「三法」が21本（挺）とある。三方というのはヒノキを割り、三方を無節としたもの。大きさの記載はなく定型はないようであるが、角材とは別に記載しているため、比較的大きな材でだったのではないかと考えられる。もうひとつはゴヨウマツとヒノキの「志々料」が合わせて25枚。志々料は穴料、板子ともいう。『木曾山雑話』（1959年）によると長さ7尺（212cm）、厚さ5寸（約15cm）、幅1尺以上であり、『飛州志 巻第参』（1746年）によると長さ6尺5寸（197cm）との記載がある。

ヒノキの数は多くはなく、大きさも不確かであるため、どのような植生で存在していたかは不明である。しかし、安曇野の西の山腹に、ある程度の大きさの天然性ヒノキが存在していたことを示す重要な資料である。

## 2 かつての里山の風景は

今度は死出ノ山から離れて、もっとマクロな視点で満願寺周辺の植生をみてみよう。

江戸時代、安曇野の地では拾ヶ堰等の用水路が開かれるとともに新田開発が大きく進んだ。それとともに田畑の肥料としての刈敷が必要とされた。江戸中期の信濃国松本藩の事例から、刈敷を刈り取る山の面積は、施す田畑の面積の10倍以上であったという試算がある。（水本邦彦著「草山の語る近世」山川出版社）ほかにもボヤと呼ばれる煮炊きの燃料や萩（牛馬の餌）や屋根材としてのカヤなど、暮らしには多くの草木が必要であった。江戸時代において安曇野の入会地等において採取する草木の権利に関する争いの記録が複数残っているが、こうした争いが各地でみられるほど、里山の資源は暮らしや生産量に直結しており、現在とは比べものにならないほど里山の利活用が盛んだったのである。その結果、当時の絵図（P.3、第3図 信州安曇郡筑摩郡画図）をみても、人々が暮らす里に近い山々は柴山や芝山になっていたことがわかる。今とは全く異なる安曇野の風景である。

このような暮らしは、化石燃料や化成肥料が普及する前の昭和30年代ごろまで続いていた。



写真3 植林した若いカラマツ林のようす  
（出典：田淵行男『ヒメギフチョウ』、1957年）

戦後に米軍によって撮影された空中写真（飛行機から撮影した写真）もかつての里山の植生を知るひとつの手掛かりとなる。1948年の空中写真をみると、満願寺の周辺の山々の草原や灌木林の面積の広さに改めて驚く。この時代、さらに戦時中は学徒動員で、松根油を採るために満願寺の奥の山に入り、アカマツの根を掘ったという話も聞いた。山火事もたびたび起こったという。

戦後は、国策によって全国各地で植林が推進された。満願寺周辺では、死出ノ山以外の国有林、そして民有林で植林が進み、山の景観は大きく変わっていく。穂高牧では特にカラマツが多く植林されたという。東京から安曇野に疎開し、蝶の生態研究や山岳写真家として著名な田淵行男が、植林された若いカラマツが並ぶ自然の景色がよくわかる写真を残している。写真の舞台はまさに満願寺周辺の沢沿いであり、ほどよく湿って明るい環境は、ヒメギフチョウの生息地であった。田淵はこの地に通り、生態写真集『ヒメギフチョウ』（1957年）を刊行した。

## コラム 満願寺の霊杉

満願寺境内の明治～大正時代の絵図をみると仁王門の左奥に、ひときわ大きく描かれるスギ「霊杉」が目を引く。

このスギは、昭和7年史跡名勝天然記念物調査報告において、植物学者小泉秀雄氏によって「栗尾山満願寺の大杉」として報告されている。その大きさはなんと、樹高約49m、目通周約10m（直径約3m）根廻り約12mと記載されている。地元では「大杉」または「一本杉」と呼ばれていた。このスギを知る地元の人によると、下は洞になっており人が入れるほどであった。落雷によって枯れてしまったという。

残念ながら今は切り株さえ朽ちて見当たらない。人間の尺度をはるかに超える巨樹は、どれほど荘厳な姿を人々に見せてくれていたのだろうか。

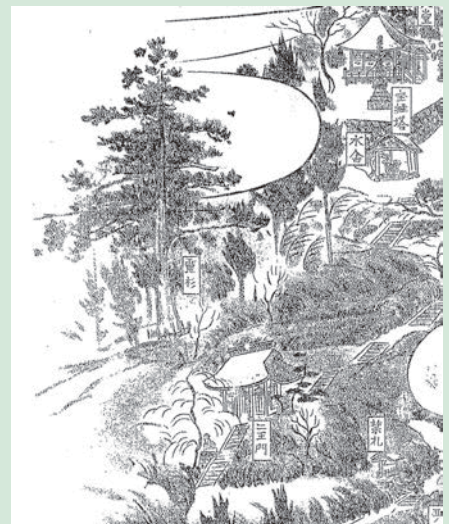


写真3 栗尾山万願寺之全景（P.8）より部分拡大

### 3 現在に息づく、満願寺周辺の自然

現在の満願寺は深い森に囲まれて存在する。かつては畑として利用していた空間は、1978（昭和53）年、旧穂高町がつつじ類やサクラ類、カエデ類を植栽し「栗尾山満願寺つつじ園」として整備された。その後1986（昭和61）年3月には、満願寺周辺の3.42ha範囲が、長野県の郷土環境保全地域に指定された。「郷土的又は歴史的な特色のある区域を含む土地の区域であって熟成した自然環境を形成している」ことが指定の理由である。

春から初夏にかけて開花する境内の植物を楽しむに訪れる人は多い。

満願寺のつつじ園周辺の開けた空間は、特に4～5月にかけて多種多数の野鳥が利用している。ここは南向きで地温や気温の上昇が周囲に比べて早く、サクラやつつじの開花が続くため、昆虫類が周囲と比較して早期に活動をはじめ、数多く生



写真4 春の境内のようす



写真5 境内のおオヤマザクラにとまるオオルリ（撮影：丸山隆）

息する。これらが野鳥たちにとって豊富な餌となっているのである。またこの空間には、野鳥にとって必要不可欠である水場や隠れ家となる低木が存在することも重要である。

現代の満願寺周辺は野鳥たちにとって魅力的な空間になっているようである。

2019年に満願寺周辺の植生調査を実施した。現在の植生図を図4に示す。色分けした植生図をみても、死出ノ山一帯の植生が他と異なることがわかる。先述したように、死出ノ山はアカマツ

群落（尾根部）～アカマツ・ヒノキ群落～ヒノキ群落（谷部）となっている。それ以外の山林は、国有林も民有林もスギ、ヒノキ、カラマツの植林が多い。このほか面積は大きくないが、コナラ・ミズナラ群落が見られた。株立ちした個体が多く、以前は薪炭林として利用された二次林と思われる。コナラ・ミズナラ群落の標高はおよそ800～1,100m付近であり、ちょうどミズナラが出現しはじめる標高である。また、沢沿いの崩落地にはオニグルミ群落が分布していた。

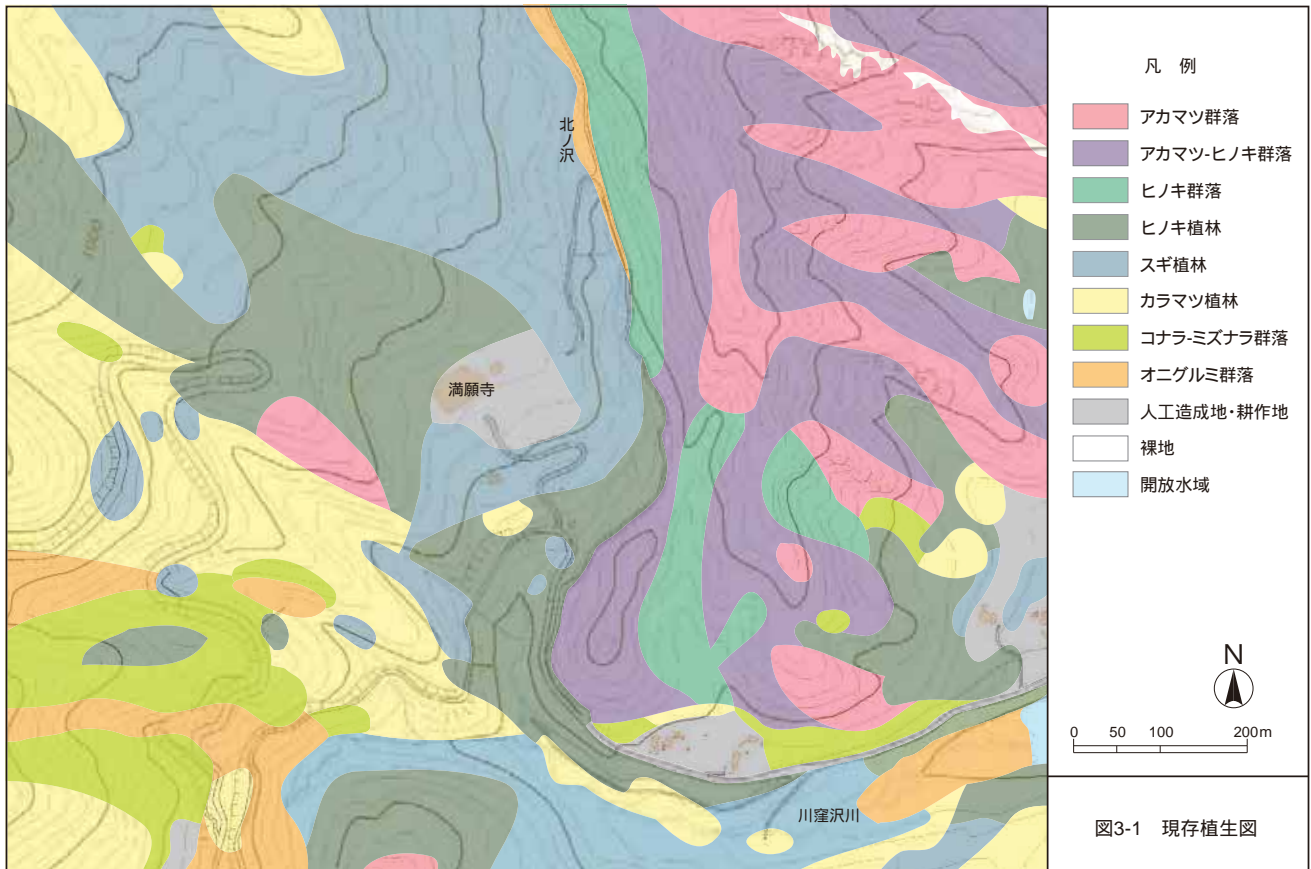


図3-1 現存植生図

図4 満願寺周辺の現存植生図

（出典：『安曇野市豊科郷土博物館紀要 第7号』，2020年3月）

ここでは満願寺周辺の植生について写真とともに解説する。



写真5 死出ノ山の尾根近くで確認されたイワナシ

死出ノ山の尾根沿いは表土が発達しておらず、かなり乾燥している。そのような厳しい環境では、亜高山帯に生育するようなイワナシ、イワカガミといった植物が降りてきていることも興味深い。

写真6 北ノ沢沿いのスギ植林のようす

北ノ沢沿い右岸沿いに広がる国有林内のスギ植林。地質は付加コンプレックスの崩壊堆積物で、水が染み出している箇所もある。このためヤマアジサイ、オシダなど湿ったところを好む植物が多く自生する。



写真7 山腹に残るかつての薪炭林

面積は広くないが、コナラとミズナラの群落が分布する。株立ちしている個体が多く、かつては薪炭林として利用されていたと考えられた。現在は樹高20～25mの樹林となっている。



満願寺周辺の植生を過去から現在にかけて追いかけてみると、人々の暮らし方や社会的なニーズの変化に伴って大きく変化してきたことが見えてきた。森林化が進み、草原や灌木林のように現代ではほとんど失われてしまった植生もある。一方で、死出ノ山のように、人為的な影響が少ない自然が残されていたことがわかった。

以前のように山は生活の場ではなくなり、多くの人にとって山は日常から遠ざかっている。しかし地域の歴史から自然をひもとくことによって、現在の自然が成立している背景を知ることができる。そこから地域に息づく歴史や自然の新たな価値が見えてくるのではないだろうか。(松田貴子)

「ふるさと安曇野 きのう きょう あした 22」  
編集 安曇野市豊科郷土博物館  
発行日 令和2年9月5日  
安曇野市豊科郷土博物館  
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8  
TEL : 0263-72-5672 / FAX : 0263-72-7772  
URL : <http://azuminohaku.jp/>